

---

# 白兎の憂鬱

JEIKJEIL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白兎の憂鬱

### 【著者名】

Z3605D

### 【作者名】

JEIJKJEH

### 【あらすじ】

満月の空 竹藪の中 莫薺でもひいて 月見団子でも食べ  
ている そんな白兎のちよつとした日常のお話

# 1・九月の十三夜 いつも隣には

1

「ヒナタ。ねえ、ヒナタ。」

私を呼ぶ声がある。今日はあんまり起きたくないんだけどな、  
「ヒーナーター、ちゃんと巣で寝ないと風邪ひくし、襲われるよお  
全く、だれに襲われるというのだ、この御世に。それに、今は暖  
かいんだから風邪引くこともないし、

「ヒナタが起きてくれない・・・もしかして、ヒナタ、風邪で死ん  
じやつた? ねえ、ヒナタ、ヒナタ! ! !」

「勝手に妄想膨らませるんじゃないよ。触つてれば生きてるくらい  
は分かるでしょうに。」

「ええ~ヒナタはいつも冷たいじゃない。」

「それは態度の問題。あと、私が冷たいのは<sup>アツ</sup>に對してだけで、  
他の兎には冷たくしてませんから。」

私の名前はさつきからこいつが呼んでるよ<sup>アツ</sup>、田向。と言ひ。  
ちなみにこの妄想癖<sup>アツ</sup>が「陽」である。

「で、今日は何なの?」

この伸びがやつてくる日は決まって口クな<sup>アツ</sup>ことが起きない。きっと  
今日も口クでもないこと<sup>アツ</sup>が起きるんだろう。

「あのね、あのね。変な動物見たの。」

「変な動物?」

「そう、あんまりおつきではないんだけど、後ろ足だけで歩いて、  
前足はバランスを取るために使つてた感じだったの  
私はため息をつく

「私たちだって、後ろ足だけで跳んで、前足はバランスじゃない。  
違うの。だってそいつら、地面から木みたいに真っ直ぐになつて  
歩いてたんだよ。」

・・・本当に口クでもない。

2

「・・・まさか・・・ニンゲン?」「今まで一番口クでもない話だつた。

2

「ほら、じつちこつち

「ちょっと、待ちなさい 陽。」

ちびに連れられて私は森の外れにやつてきた。

「ねえ、今日もあのうさぎさん、いるのかな?。」

「どうだろうね。早く行こつ。」

そんな会話が耳に入る。間違いなく、ニンゲン。

「陽、聞いて。アレはすごく悪い生き物なの。木という木を切り倒して、自分達しか住めない繩張りを広げて、私達兔を連れ去ることだつてあるんだから。」

私がこれだけ真剣にしゃべつてもこのちびときたら

「そんなことないよ。楽しいよ、あれといふと。」

と全く分かつていないのでから

「だから、だまされてるのよ。油断させといて、連れ去るの。」

なんて言つたところで田の前にはむづむづは居なかつた

向こうを見ればニンゲンと戯れてゐる。

「ヒナタもおいでおお~」

「知らない。私は行かないからね。」

私はそのまま森に帰つてしまつた。

まあ、なんだかんだ言つて昔よりは静かになつたニンゲン達をそれ

ほど警戒しては居なかつた。

だから そのときは予想できなかつたのだ。

陽がその日を境に帰つてこなくなるなんて・・・。

3

日向は焦つていた  
陽が帰つてこない

もつ、二日も経つのに・・・

「・・・やつぱり、ニンゲンが・・・？」

そして日向は森の外をにらみつける

「ニンゲンが・・・また、私から・・・大切な鬼を・・・奪つとい  
うの・・・？」

日向の真紅の瞳から一筋の涙がこぼれた

そして

「・・・許さない」

「・・・絶対に許さないんだから・・・！」

森の外へと飛び出す日向

「陽・・・陽・・・陽陽陽陽陽！・・・！」

弟のよくな存在だった兎の名を呼びながら  
その瞳を怒りに燃やし

日向は走った

止める者など何も居ない

彼らのニンゲンに対する想いは一つだから

でも誰も同調はしない

みんなニンゲンの恐ろしさを知っているから

日向は独り走る

4

えと、ここはどこだらう？

たしかヒナタがニンゲンついていつてたのとあそんで、  
きがつくとずいぶん森から離れてて  
で、帰ろうとしたときに  
なにか「すごく速いモノ」にぶつかったんだつたっけか  
全身がすごく痛い

あんまり痛いから目が覚めてしまった

「えと、ここはどこだらう？」

見知らぬ場所だった

僕が決してみたことのない、絶対に森にはあり得ない光景

「あ、起きたみたいだ。」

「よかつた。生きてたんだね」

ニンゲンが僕に心配そうな視線を送っている

僕はまだ体中が痛かつたけど、なんだかちょっと元気になつた気がした。

次の日からニンゲン達は僕に「ほんをくれたり、一緒に遊んだりそのうちにニンゲンの言葉もちょっとはわかるようになつてきた今見てるニンゲンが入つてる箱は「てれび」で

それと線でつながつてゐるきかいが「げーむ」

で、おつきいニンゲンが「おにいちゃん」でちつちやいニンゲンが「ひな」

しばらくはヒナタと聞き間違えてびっくりしてたけど、慣れた慣れてしまつべから「長く」と云つた。

5

この「おへや」と「おへと」をわけて「まど」から太陽の光が振つてゐる。

そういうえば僕の名前は陽。太陽の陽。降り注ぐ光で、彼女の名前は日向。太陽が作るまどろみの空間

「わういえば、ヒナタは今頃どうしてるんだろ」

長ここと怪我をして忘れてた。もしかして、ヒナタは僕がニンゲンにさうわれたと思ってるんじゃないだらうか。

「あれから、どれくらいたつたっけか・・・」

数え始める

あの頃は蝉が鳴き始めた頃で・・・今は鈴虫とかが元気だから・・・

「・・・3ヶ月・・・？」

1年の半分の半分。こんなに長く森の外にいたのは初めてだと思つ。

「・・・ヒナタ、心配してるかな・・・？」

ふと、ヒナタが恋しくなつた・・・

6

もういくつも寝たら十五夜ね・・・

陽を探してニンゲンのマチに潜伏すること三ヶ月

未だに足がかりさえ掴めない。

十五夜の私の席に隣に陽が居ない。それを考えるだけでぞつとした。

「・・・本当に・・・どこにいったのよ・・・まさか、もう・・・」

ニンゲンは兎を火あぶりにして食べるつて聞いたことがあった

それを思い出して、私の中で嫌な予感が駆けめぐる

「・・・ダメダメ。あきらめちゃ・・・」

気合いを入れ直す。そうだ、まだ望みを失った訳じゃない

「もう一回、森の近くから、探し直してみよう・・・」

そう決意した私の前から強い光が降り注ぐ

あまりのまぶしさに目をつむつた私の目の前

けたたましい音を鳴らしながらその光源が猛スピードで迫つてくる

そして

私はそのままぐぐく速いモノにぶつかつて

すく痛くて

気を失つたのだった

7

ひなちゃん達には悪いけど、

僕はあの「おうち」を抜け出していた。

耳を澄ます

僕に怪我をさせた「ぐるま」の音が響く  
あれにあたると本当に痛い。

実際、ひなちゃん達がいなかつたら、僕は、死んでいたかもしだい。

だから不安になつた。

「・・・ヒナタ・・・。」

キキーツ

今の音は・・・

確か・・・「ぐるま」が僕に当たつたときと

同じ音

僕は  
走る

8

空と地面が何度も入れ替わつて

私は体中から真っ赤な血を吹きながら転がつていた

私の目の前には一本足で立つ不快なシルエット

ニンゲン・・・

万事休すつてやつかしら?

そんなことも考えながら、私の意識は混濁していく。

「・・・ヒナタあああーーー！」

変だな・・・陽の声が聞こえる・・・

でも、無事で　　よかつた

a f t e r . . .

結局その年の十五夜は、ヒナタとは一緒に過ごせなかつた。

この森にヒナタはいなければ  
僕はもう子供じゃないから

もうヒナタがいなくても大丈夫。

大丈夫

・・・て何勝手に入聞きの悪いシメ方してゐるよ、あんたはーーー！」

僕の後ろから白兎がどついてきた

「え、ヒ、ヒナタ！？帰つてきたの！？

僕は驚いて振り向く

「ええ、傷が治つたからね、「おにいちゃん」と「ひな」の「おとうさん」と「おかあさん」が返してくれたわ  
「そりなんだ・・・よかつたね。」

僕は心底ホッとした

「あんまり良くない。」おにいちゃん」と「ひな」は泣き始めるし、  
しまいに「おとうさん」の「くるま」に乗せられて、  
危うく胃の中身全部吐くところだったわ。」

そしてヒナタは遠い目をして言つた。

「でもまあ、ニンゲンも、悪くないモンね。」

「ヒナタ？何か言つた？」

ヒナタは赤くなつてそっぽを向いた

「な、何も言つてないわよ。でも・・・

「でも？」

「たまには、会いに行つてあげた方がいいかなあ？あのニンゲン達  
に・・・」

すごい。ヒナタ、白兎なのに真つ赤つ赤。

「くすす」

「何がおかしいのよ、陽。」

「いや、だつてヒナタ真っ赤なんだもん。それに・・・」

「それに?」

「」」」ちから会いに行く必要はなせそうだよ?」

そう言つて僕は森の方を指し示す。

「つさぎさん? いないのおー?」

間違いよつもない「ひな」ちゃんの声だつた。

「行かないの? ヒナタ。」

「ちょっと待つてよ。行くわよ、行くから。」

そして、また森は平和になつたのでした。

## 1・九月の十三夜 いつも隣には（後書き）

短編連作にしたいと思ってたのに2で終わっちゃうといつダメダメ作品です。

童話と銘打ちながら漢字が難しかったり内容が重かつたりするので小学生高学年かその親御さんに読んでいただけたらなーと思っています。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

## 2・十月の二十三夜 雨のち暴りの大冒険！？

0

・・・あの事件からもう一ヶ月が経とつとじていた  
私もこの一ヶ月はすゞく平和だった

「ヒナタ～」

私を呼ぶ声がする

また 口クでもないことが 始まりそうだ  
嘆息 まあ 嫌いじゃないんだけどね

1

「ヒナタ～」

私を呼ぶ声がする。

まだ、寝て いたいのだが・・・。

「ヒィイナアアタアア～」

彼はそれを許してくれそうにない

「まったく、何なのよ。こんな朝早くから。  
顔を出してやる。

「ねえ、ヒナタ。昨日すゞい大雨が降つたじゃない？」

「ああそういうば振つたような振らなかつたような・・・。」

「でね、でね、そのとき崩れた土砂の中に、トンネルみたいのがあ  
つたの。」

いやな予感がよぎる

「それで、ヒナタも一緒に行こうつて。」

「嫌、一人で行きなさい

「だつて、一人だと怖いんだもん・・・。」

陽がうつむく。まあ、前回のこともあるから一人で行かすことはで  
きないのだが・・・。

「どうしてもいきたいの？陽」

「どーしてもだよ。」

再び嘆息 まあ、いいか

「しょうがないわねえ、行つてあげるわよ。」

「ヒナタ～ヒナタ～。」

「ちょっと待ちなさいよ、あんた速過ぎー。」

まだ、雨がしとしと降り続いている中、私たちは竹やぶの奥のほうに来ていた。

「ほら、ここ。ここ。」

陽が指示したところは確かに土砂が崩れその中から洞穴のよう

なものが出ていた。

「くだらない。きっと防空壕か何かよ。」

「ヒナタ～早く～」

「つてもう入つてる！？」

結局行くしかなかつたのだつた。

穴の中は明かりも何もなくずっとただの一本道だつた。やがて行き止まりに突き当たる

「ほら陽、何もないわよ。帰りましょ～」

・・・

返事がない

「・・・陽？」

・・・

自分の声が空しく響くだけ。

「ちょっと冗談じゃないわよ！？」

私は走る。どうせ同じ一本道だから道に迷うなんてことはない

そして出口が見えてきた。

外へ出る

すっかり雨も止んで青い空と太陽が輝いていた。

「えっと、」

「……何処？」

そこについたのは見慣れた竹やぶではなく  
広大な平原だった。

3

「どうなってるのかしら？」

私は当てもなく草原をさまよっていた  
先ほど洞穴に戻ろうともしたが私の背後にはもうそれらしいもの  
はなかつた。

ほどなくして草原の中に街道が見え始める。

「……とりあえず陽を探さないと……。」

しかし、あてもなければ手がかりもない。土地勘がないから下手に  
動けない。

「……どうやって……？」

考えてもしようがないものはしようがない  
まずはできることからやつて行くことにした

「寝床と、食べ物。」

そのためにも街道を使って私は街に出た。

人間の巣は一番安全で食糧確保が容易であることを私は経験で知  
つていたから。

4

「ヒナタ～早くおいでよ～」

洞窟の中で思い切り走ってしまったボクは振り向いてヒナタを待つ  
た。

「……。」「……。」「……。」

真つ暗で、誰も来る様子はない。

「もう、いじわるなんだからあ……。」

そろそろやいてボクは元の道を引き返し始めた

光が見えて、洞窟を出る。と

そこについたのは黄金の大地だつた  
よくみると足のしたにあるのは全部砂

「えつと・・・。」

思い出す。たしか二ングエンたちは「」をこんな風に呼んでいたはず  
だ

「・・・さばく・・・？」

5 「・・・困つた・・・。」

草原を進んで、荒野を抜けるといつの間にか私は森の中にいた。

「・・・人間の巣どころか・・・ほかの生き物すら見当たらない・・・

・。」

木になつていた適当な木の実を取つて食べる。もう何日も森の中  
にいるため、このくらいの食糧確保はできるようになつていた

「陽は・・・大丈夫かしら・・・？」

空を見上げた

鳥も雲もない青空が広がつていた。

6 「陽  
叫ぶ  
！」

そして聞き耳を立ててみた

「

「どうやら近くにはいないようだつた。

「「」に行つちゃつたのかしら・・・？」

「・・・暑・・・。」

さばくを歩き始めてもう何時間も経つていた。

太陽はじりじりと照り付け、砂は視界いっぱいに広がつていた

水も食べ物もない。

お腹はぐうぐうで喉もカラカラだった

「も・・・ダメ・・・」

へたりこむ僕。本当は倒れ込みたいくらいなのだが熱々の砂の中で倒れ込んだらあつと言つ間に干上がつてしまつだらつ。

「・・・ヒ・・・ナタア・・・」

もう声も出せない

そのときだった

「陽  
！――！」

ヒナタの声がはつきりと僕の耳に届いた  
その声を頼りに、僕は1歩1歩と歩き出す。

7

森が終わり、目の前に大きな砂漠が広がる。  
私はそこでもう一度叫んだ

「陽  
！――！」

耳を澄ます。

何も聞こえなかつた

「本当に何処にいるのかしら？もしかしたらもう家に帰つているのかしら？」

都合のいい妄想なのはわかつていて、でも そつあつて欲しいと願つた。

そのとき

砂漠に一つの小さな影が見えて來た

「・・・陽！！」

ヒナタは走る。

小さな影はゆっくりと動いている。  
ふらり、とその影がバランスを崩した。

田向はせつと、それを受け止め、ぎゅっと抱きしめた。

「よかつた・・・陽・・。」

そのまま砂漠を出て、森の中に入る。

8

「陽・・・ほら・・・食べ物よ。」

陽は田を閉じたまま微動だにしない。

「・・・ねえ、・・・田を開けてよ・・・陽・・・。」

田向はその果実を自分の口に入れる。

噛み碎いた後、それを陽の口の中に流し込む。

「・・・つ・・・うん・・。」

「・・・陽。おいしい？」

田向の眼に涙が浮かぶ。

「・・・陽・・・。」

涙が陽の頬を濡らした

「ねえ、眼を覚まして！いつもみたいに、ホラ、飛び込んできなさいよ！－！ヒナタつて呼んでよ。ねえ、陽！陽！－！」

力の限りに叫ぶ。ほかに何もいこの世界で、

「なんで・・・。なんで眼を開けてくれないの・・・。私の言ひことちゃんと聞きなさいよ・・・。・・・陽・・・。」

天を仰ぐ。陽の体は容赦なく冷えていく。

「私は神なんか信じない。だけど・・・。今ばかりは私のわがままを聞いて！－！ねえ、陽を返して！－！私の大切な、大切な兎を！－！」

なんで奪うの！－？こんな小さな命を。運命だから？そんなの認めない！－！私が覆してやる。運命なんて！－！・・・」

その叫びは透き通るような青い空に吸い込まれていった。

9

夜。体中に落ちる冷たい感覚に眼を覚ました。

ザアアアアアア

「雨・・・。どこか、屋根のあるところに行かないと・・・。」  
独りつぶやく。

そして、陽を担ぐと私は歩き始めた。

ザアアアアアア

冷たく突き刺さる雨が体力を奪い、足取りを重くする。

陽の体が温かく感じるのはこの腕が雨で冷え切つていいせいだらうか……？

そして、私は手近な洞窟を見つけ、その中に入り込んだのだった。

「ゴロゴロゴロゴロ……

外では雷がうなつてこる。

「酷い雨だね。これじゃしばらへんこむしかなさそうね。」

「・・・うん・・・。」

そのときだつた。私の傍らから声が聞こえたのは。

「・・・うう・・・ひなたあ・・・。」

喘ぎ声で私の名前を、小さな小さな声で、陽は私の名前を呼んだ。

「！陽。陽！――」よ。私はここにいるよ――！」

陽が眼を覚ました。私は喜びのあまりにまた、涙を流していた。

「陽・・・よかつた陽・・・。」

「ひなた・・・ひなたあ・・・。」

暖かさを取り戻した陽と私は、その洞窟の中、寄り添いあつて眠つたのだった。

10

次に目が覚めたときも、外はものすごい雨だつた。

死の淵から戻つてきたばかりの陽は、寒さと空腹で、再びその小さな命を脅かされ始めていた。

「・・・寒いよ・・・。ヒナタ・・・。」

私は、その冷え切つた体をぎゅっと抱きしめる。

「・・・ヒナタ。」めんね・・・。」

突然に、ぱつりと陽が言つた

「・・・何が？」

「僕のせいだよね。ヒナタが、こんなことになつて、こんなところ

で、ずっと一人だけで・・・。

僕、ヒナタに迷惑かけてばっかりで、ヒナタのそばにいても、邪魔なだけで。」

陽はしゃべり続ける。

「僕なんかのために、ヒナタが怪我したり、ヒナタがこんなにこうに来ちゃつたりして・・・。

僕、迷惑だよね・・・。居ない方が・・・いいよね。僕なんか・・・。」

陽がそつと私の腕から離れる。

「さよなら・・・。ヒナタ。」

陽は、まだ雨の降りしきる外に走つて行こうとする。

「まちなさいっ！！陽。」

その手をつかむ。

「迷惑よ、ええ迷惑ですとも！…そいやつて勝手に考え込んで、勝手に結論出して、勝手に行動するところなんか特にね！！」

もう一度、陽を強く抱きしめる。

「本当に、いつもろくでもないことしかしないし、いつも危険を顧みないし、反省を知らないし。

寂しがり屋のくせに、好奇心だけは一人前で、結局私が居ないと何にもできなくせに・・・。」

陽は私の腕の中でうずくまつていた。

「私が居ないと何にもできない仔兔のくせに、何が迷惑よ？何が居ない方がいい、よ！？」

私はあなたを一度たりとも居なくともいいなんて思ったことはない。

私は、・・・「うづくまつている陽から嗚咽が漏れる。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい。」

小さな声で、陽が謝り始める。

「いいのよ、私の可愛い仔兔。あなたはまだ、何も考えなくとも、何も知らなくてもいい。」

あなたはまだ、甘えていい年頃なんだから。

迷惑なんてこと、あるものか・・・ただ、あんまり心配かけさせな

い  
で  
・  
・  
・  
。

「うめんない・・・うめんない・・・。」

## 陽は謝り続ける

1  
1

また、夜が更けて、明けた。

西に今日も陰り續いてしる

「・・・うん・・・なんとか。」

陽は既にかなり衰弱していた。

い  
じ

わのとせだ二  
た

ザザザ・・・ガラガラガラガラ

突然、洞窟が闇に包まれた。

— 土砂崩れ ？

道田の園の北盤が緑くが、ついでに北の北側の山

私は同窓の奥山田を向かう。

# 洞窟の奥 ・・・か ・・・。

卷之三

私は衰弱している陽気を抱かねばならぬ。

「行くつて……どう?」

「私たちの竹林に帰るのよ。」

和は歩き始める

なんとなくたけど、確信があつた。こちに行けば多分

帰れる

光が見える。

その先に見えるのは、快晴の明るさ。

洞窟を抜けると、そこは

見慣れた竹林。

見上げれば、雲一つ無い空と、笹の葉の木陰。

そう、私たちは

帰ってきた。

12

そのあと、いろいろあつたけれど。とりあえず、今は日常を取り戻しつつある。

気がつけば、あれから何年も経過していた。

私は相変わらず、莫座でも敷いて、一人月を見ている。

最近もの寂しく感じるようになつたのは、やつぱり

「ひ、騒がしい奴がいないからかしら・・・ね。」

つぶやいてみた。つぶやいたところで何が変わるわけでもない。

そして、私はまた月を見上げ、あの頃の出来事に、思いをはせていた

・・・

「隣、いいかな? 日向。」

いいかな? とかいいながら既に隣に座つているそいつ。

「許可した覚え、無いけど?」

「僕は日向に断られた試しがないんでね。」

そいつは憎らしい笑みを浮かべる。

「ふん。断つても、無駄だろうから断らないだけよ。」

「さすが、日向。よくわかつてる。」

私は顔を赤くし、しばらく沈黙が流れる。

「それにしても、あんたはいつの間にか私を追い越したのよ?」「何のこと?」

そいつは本気で首をかしげてる。

「背丈よ背丈。なんであんたはそんなに大きくなれるわけ?」「

すると、またそいつは笑いながら、

「僕が雄だから、かな。それと、僕ももう仔兎じゃないって証拠である。」

「まったく、まだまだあんたなんか未熟なのよ。」

「なら、未熟の間は面倒見てもらおうかな、日向。」

やれやれ、私は昔から、この仔に口で勝てない。まあ、昔は涙目とか使わっていたけれど、今は口がうまくなつて本当に口では勝ち目がないのだ。

「し、しょうがないわね……。一人前になるまでだからね……。」

「別に一生でも、僕は構わないよ。」

そんなことをほざいてこいつは笑っていた。

「一生なんてお断りよ。」

ふい、と顔を背ける。こんな火照った顔をいつまでも見られたくないからだ。

「日向。好きだよ。」

突然そんなことを言われる。

「やだ。昔みたいに呼んで。」

昔甘えさせてた分、今は甘える側に回つてみる。

「しようがないなあ、じゃあ。」

「ヒナタ。好きだよ。」

あの頃のような無邪気な笑み

私の顔はきっと真っ赤だ。でも、はっきりと声にする

「私もだよ、陽。」

「私も、陽のことが好き。」

そして、月夜は更けていった。

## 2・十月の二十三夜 雨のち曇りの大冒険！？（後書き）

陽が大人になるといつ自分でも予想していない（おい）最後になつてしまい、連載続くの？コレ。という状態です。てか最終話です（おい）

最後はラヴラヴで書いてて恥ずかしい（マテ）といつ状態でした。実は大人陽を主人公に別連載で書きたいなーと画策してますがまだネタが思いつかないのでしばしあ待ちをw  
最後まで読んでいただきありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3605d/>

---

白兎の憂鬱

2010年10月9日16時26分発行